

現代社会が直面する経済問題を、過去、現在、未来という時間軸との関連で学んでみませんか？

経済学は、貧困や格差の解消に向けていかなる議論を提示できるのでしょうか。また、経済学者たちは、経済現象をいかにして客観的に認識しようとしているのでしょうか。このような問題関心から、私は経済学の理論や方法論について歴史的に研究をしています。そのため、学生のみならず様々な学者の学説や思想等をめぐって議論することが多いのですが、その際には原典に立ち返って理解を深めていく姿勢を大切にしています。

幸運なことに、本学の図書館（神戸商科学術情報館）には、貴重書を収めた『瀧川文庫』* が設置されていますので、イギリスを中心とする過去の社会経済思想家たちの原書に直に触れることができます。リプリント版の書籍では感じることもない重厚さに圧倒されますが、そのような素晴らしい環境で研究活動を行うことができます。これは、本学大学院で学ぶことの大きなメリットのひとつではないかと考えています。

アダム・スミスが経済学の体系的な議論を示して以来、経済学は、理論分析、歴史分析、政策分析を三位一体として展開して

きました。さらにJ.M. ケインズは、経済学者は「将来の目的のために、過去に照らして現在を研究しなければならない」し、「ある程度、数学者であり、歴史家であり、政治家であり、哲学者でなければならない」と述べています（『ケインズ全集』第10巻、173-174／訳233）。このケインズの言葉が、需給均衡理論の考案者アルフレッド・マーシャルの追悼論文において記されたことも踏まえるならば、なかなか意義深い指摘ではないでしょうか。経済学を幅広く学ぶことを通じて、現代社会が直面する各種の経済問題を、過去、現在、未来という時間軸との関連において多角的に捉え、専門的に分析できる能力を培いたいものです。

*『瀧川文庫』は、「ベティ＝ダウナント著作コレクション」、「イギリス社会思想コレクション」、「サー・ジョン・ヒックス旧蔵書および文書コレクション」から構成され、卒業生の瀧川博司さんが寄贈されたものです。



経済学専攻担当教員・准教授
松山直樹（専門分野：経済学史）